■研究十二月往来〈251〉

妄執からの解放
――〈梅枝〉小考――

石井倫子

天徳内裏歌合で、平兼盛の「しのぶれど色に出でにけりわが恋は物や思ふと人のとふまで」と壬生忠見の「恋すてふわが名はまだき立ちにけり人しれずこそ思いひそめしか」が番えられ、村上天皇の意を汲んだ判者の実頼は兼盛を勝ちとした。負けた忠見は落胆のあまり「不食の病」となって衰弱して死んでしまう。あまりにも有名な和歌執心説話だが、右の例を挙げるまでもなく、芸道をめぐる争いは古くから日常茶飯事であった。

このような芸道遺恨譚のひとつに材を取った〈梅枝〉は、狂乱物の〈富士太鼓〉との関係が問題とされる曲である。宮中で管弦の催しがあった時、富士と浅間という二人の伶人が太鼓の役を望んで争い、富士が浅間に殺されるという事件が起こった。上京してそれを知らされた富士の妻は、自分の管弦を退けた夫の身勝手さを嘆きながら、形見の烏兜と装束を身に付け、太鼓を敵と定めて娘と討ち懸かり、本懐を遂げて故郷へ帰っていく。この〈富士太鼓〉の世界を前提とした〈梅枝〉は、富士の妻の霊が夫への妄執を語り、形見の装束を纏って舞を舞い、回向による救済を求めるという夢幻能に仕立てられている。

富士・浅間の刃傷事件の一部始終について、〈富士太鼓〉のワキは次のように語る。

さても内裏にて七日の管弦の御座候。役者国々より召されて上り候。中にも津の国天王寺より浅間と申て隠れなき大鼓の上手の候。これは召されて上り候。同じく住吉より富士と申す楽人。これは望み申して罷り上り候。（中略）名こそ上なき富士なりとも。あつはれ浅間はまさうずるものをと遂せられしかば。また富士が上手と申上ぐる人もなく候。浅間このことを聞き。憎き富士が振舞かなとて。かの宿所へ押し寄せ。やすやすと富士を討つて候。

（天理図書館蔵『遊音抄』「富士太鼓」）

宮中に召された浅間と強引に推参した富士。二人の立場の違いと富士が討たれた理由がここに明確に示されているのだが、

シテ／むかし此国天王寺に。あさまといつし伶人あり。同く此すみよしにふじと申伶人ありしが。其比内裏に管弦のやくしやをあらそひ。たがひに都にのぼりしに。ふじ此やくを給るによつて。あさまやすからず思ひ。ふじをあやまつてうたせぬ。其後ふじがつま。おつとのわかれをかなしみ。つねは太鼓をうつてなぐさみしが。それもつゐにむなしく成て候。

（松蔭女子大蔵堀池宗活本「梅がえ」）

〈梅枝〉の前シテは、浅間と富士の両人が同じ立場で太鼓の役を争い役を得た富士がそれを妬んだ浅間に討たれたと語る。〈富士太鼓〉では母と一緒に上京する子方の娘も〈梅枝〉には出てこない。この設定の違いは「罪なくして討たれてしまった富士と一人残された妻の悲劇」を印象付ける効果を狙ったものに相違なく、この能の作者が「妄執に迷う女」というベクトルを志向していたことを窺わせる。

〈梅枝〉では本歌取り的にいくつかの夢幻能が利用されている。たとえば、ワキが住吉で一夜の宿を借りるという設定は、〈雨月〉を連想させるものであると同時に〈松風〉の影響を感じさせずにはおかないし、富士の形見の

舞装束と烏兜を身につけて楽を舞うシテの姿には、自ずと〈松風〉や〈井筒〉のシテの姿がオーバーラップする。〈梅枝〉の作者は意図的にこれらの趣向を採り入れ、死してなお妄執にとらわれ続ける女性の姿を描き出そうとしたのであろう。

とはいうものの、〈梅枝〉が単なる「妄執の能」の枠内に収まりきらない要素を持っていることもまた事実である。法華経を読誦するワキの前に夫の形見の舞装束姿で現れた富士の妻は、これこそまさしく「変成男子」の姿ではないかと述べ、八歳の龍女が忽ち男身と転じて悟りを得たという提婆達多品のエピソードを持ち出して己の男装姿を正当化する。妄執の能に「変成男子」という言葉が出てくるのはいささか唐突な感じもするが、ワキが一般的な「諸国一見の僧」ではなく、ことさら「甲斐身延山の沙門」、すなわち日蓮を思わせる人物に設定されていることの意味がここで明らかになる。

八歳の竜女、蛇身をあらためずして仏前に参詣し、価直三千大千世界と説かれて候如意宝珠を仏に奉りしに、仏悦て是を請取り給ひしかば、此の時、智積菩薩も舎利弗も不審を開き、女人成仏の手本是より起て候。委細は五の巻の経文之を読むべく候。　（日蓮『女人成仏抄』）

法華経の行者日蓮は女人成仏の原理を提婆達多品の龍女成仏に求め、これを喧伝した。後場においてワキが法華経の優位性をことさら強調していることを考えても、この能のもう一つのテーマが「法華経による女人往生」であることは間違いない。

夫の形見を身に着けただ涙に沈むばかりだった昔を語る富士の妻は、自らの執心を晴らして欲しいと訴え、懺悔の物語を始める。

さるにても我ながら。よしなき恋路におかされて。ながきあくしゆにだしけるよ。さればにやおんないの。みだれかみ。ゆひかひなくもこひころもの。つまのかたみをいたゝき此かりきぬを着しつゝ。つねにはうちしこの太鼓の。ねもせずおきもせず泪。しきたへのまくらがみに。残るしうしんをはらしつゝ。仏所にいたるべし。うれしの今のおしへや。おもひ出たる一念の。おこるはやまふと成つゝつがざるはこれくすり成と。こじんのをしへなれば。おもはじく恋わすれ車もすみよしの。きしにおふてふはななれは。手をりやせまし我心。ちぎりあさぎぬのかた思ひ。しうしんをたすけ給へや

（堀池宗活本）

〈富士太鼓〉の後日談的な回想である。ここには夫を討った浅間への怨みなどは一切なく、彼女の思いはただひたすら夫へと向けられているのだが、その一方妄執の罪にすこぶる自覚的であり、終始一貫して救いを求めている点も特徴的である。ワキの求めに応じて舞う【楽】も、〈松風〉や〈井筒〉のような、恋しい男と一体となったエクスタシーの表出としての移り舞とは位相をいささか異にした。いわば狂言綺語としての「懺悔の舞」であって、その意味では〈檜垣〉や〈定家〉などにより近いし、深草の少将が乗り移った体で百夜通いの様を見せる〈卒都婆小町〉さえも髣髴とさせる。

また、亡き人の形見を身に着けて舞う自らの舞姿に対して「うつつなのわがありさまやな」と醒めた眼を向けるシテの姿には、狂乱しながらも自らが物狂であることを自覚している思い故の物狂のシテにも通じる、ある種の理性が感じられる。この点において「梅が枝、大事の能也。執心の狂女幽霊なり」という『実鑑抄』の指摘はまことに当を得たものといえよう。

女物狂たちは恋しい人との再会によって狂いから覚めるが、死してなお恋しい人を慕い続ける夢幻能の女たちは、いつまでも妄執の世界から抜け出すことができない。妄執に迷う富士の妻の魂を「変成男子」「女人成仏」というキーワードによって法華経の功徳の中に掬い上げた〈梅枝〉は、執心の闇晴れがたい夢幻能の女たちに救いを与えようとしたのではなかったか。

（日本女子大学助教授）